

## プロローグ

わたしが学部生のころ、学生のあいだでこんな噂が流れた。ハリスという名のフェロー〔研究費を支給される特別〕が、翻訳の授業の担当を拒否したというのだ。それも、自分は「翻訳」とは何かわからないからだという。

彼は教授会に自分が教えるよう依頼されているものは果たしてどういうものなのか答えてくれ、と要求した。そんなの、みんな知っているはずだ！と教授連は言った。何世紀ものあいだ、翻訳はこの大学で教えられてきたのだから。しかし、大学の伝統を守ることができるといふことと、

自分が何について授業しているのか知っていることは同じではない。ハリスとしては、上司たちが定義できない科目を教えることはどうしてもできなかったのだろう。

われわれ学生は、こいつは傑作な話だと思った。下っ端教員が、退屈な仕事から逃れるため哲学的な難問を突きつけ、旧弊な連中に一泡吹かせてやったのだ、と。

おとなになりたての時期に、わたしはこのロイ・ハリスという人物〔著、一九三二—一九四五、言語学〕が出した難問に魅せられながら答えが見出せず、歯がゆい思いをした。それにもかかわらず、あれ以来何十年ものあいだ、あつかましくも翻訳を教えつづけてきた。また、たくさんの本を翻訳したし、翻訳・異文化間コミュニケーション専攻〔プリンストン大学組織の〕の長にもなった。どうやら、わたしがハリスの質問に答えるときがきたようだ。

しかし、答えは問いが適切になされたときにこそ、もっともよく見つかるといふものだ。「それは何か？」という設問は、ふつう探求に役立つ出発点とはならない。ほとんどの場合、まっしぐらに言葉の意味をめぐる重箱の隅をつつくような議論に陥ってしまうからである。

もちろん、「翻訳」という言葉の意味が、興味をそそらないわけではなく、現にわたしはこの問題に本書の章のひ

とつを充てている。しかしそれは、こちらがどんな表現を用いるにしろ、それでも生じてくるほかの多くの問いほど重要性をもたない。

そのような問いをいくつかあげてみよう。たとえば、われわれは翻訳から何を学ぶことができるだろうか？ それわれわれに何を教えてくれるだろうか？

それから、ほかにも多くの問いが浮かぶ。現時点で、われわれは翻訳について何を知っているだろうか？ 翻訳に關してさらに知らなければならないのは、どんなことだろうか？

また、次のように問う必要もある。最良の翻訳法について意見を述べたり、教えをたれたりする人は、それによって何が言いたいのか？ すべての翻訳は、同一の種類のものなのか、それともさまざまな種類があつて、それぞれが異なる働きをもつのか？ 翻訳するということは、書いた話したりすることと根本的に違うのか、それともわれわれが他人の言わんとすることを理解できるという、いまだ説明されざる不可思議な現象のひとつにすぎないのか？

本書は翻訳法やわたし個人の翻訳技術を伝授するものではない。その種のもは、すでに良書がたくさん出ている。それらより劣る本をそこに新たに加える必要はまったくな

いだろう。

そうではなく、本書はわたしには真の問題と考えること——すなわち翻訳とは何をなすものなのか理解すること——、これをめぐる挿話、実例、議論で構成されている。

わたしとしては、翻訳の果たす役割の解明とおして、多様な種類の文化的、社会的、人間的な問題について総括的な展望を提示しようとしたつもりだ。そのために、学術書や研究論文を参照し、博學な友人の知恵や知識を拝借し、また多くの場合、自分の個人的な経験を活用した。

わたしはイギリスで育ち、アメリカに住んでいるので、本書が取っているものの見方は、はっきりと英語圏のものである。

英語は現在のところ、もっともよく使用される国際語であるため、英語を母語とする人たちは、そうでない大多数の人たちよりも、翻訳とは何かを理解するのが困難だ。これこそ、わたしが翻訳について書く主な動機となっている。

翻訳が過去に何をなし、今日何をなしているのか、翻訳について人びとが何を語り、なぜ語ってきたのか、翻訳には一種類しかないのか、それとも多種類なのか——こうしたことを知ろうとすれば、遠くシユメール、ブリュッセル、北京まで、また幅広くマンガ本や古典的文学作品まで、さ

らに人類学、言語学、コンピュータ・サイエンスのようさまざまな周辺の学問分野にまで探索の手を伸ばさなければならぬ。翻訳が何をなすのかという問題は、ひじょうに多くの解答可能な問いを提起するので、翻訳とは何かという厄介な問題は、当分のあいだ、棚上げにしてもかまわないだろう。